

# 中高年未婚者の福利とサポート・ネットワーク

澤口 恵一  
(大正大学)

Well-being and Support Network of Never Married Men and Women  
SAWAGUCHI Keiichi

この論文では40歳以上の未婚者の福利を総合的に把握したうえで、生活満足度に対する親族サポート・ネットワークの利用可能性の効果を検証する。NFRJ03データの分析から、中高年未婚者の福利や健康状態は、有配偶者に比べると低い水準にあることが確認された。親族サポートの利用可能性は、必然的に限られており、その構造も親ときょうだいに集中する傾向が強い。したがって問題が生じたときのサポート資源の利用可能性は、有配偶者に比べて限定されている。ただし、未婚者の生活満足度を説明する要因として、親族サポート・ネットワークに有意な効果は確認できなかった。

キーワード：未婚、福利、サポート・ネットワーク、生活満足度

## 1. はじめに

晩婚化と未婚率の上昇に伴い、必然的に中高年未婚者の人口比率が増大しつつある。生涯未婚率は、男性で12.6%、女性で5.8%に達し、わが国における50歳以上の未婚者数は、200万人を超えている(平成12年国勢調査)。もはや非婚は、現実的なライフコースの選択肢として確立された状況にある。とはいえ、未婚者の生活や意識については体系的な像がつかめていない。その生活実態を把握し、孤立しがちな中高年未婚者のサポートについて検討することは、家族に依存した福祉政策を採ってきた日本の政策的な課題ともいえる。

本論ではNFRJ03データから、中高年未婚者の生活像を記述的かつ総合的にとらえ、未婚者の福利を心理と身体面の面から注目する。以下の記述では、中高年未婚者の生活像を、(1)居住形態と世帯、(2)就業と所得、(3)心理的・身体的福利の状態、(4)サポート・ネットワーク資源への期待と援助関係の順に記述していくことにしたい。

先行研究でもたびたび指摘されているように、中高年未婚者の福利は一般的に低いとされている。結婚による利得(配偶者とのコミュニケーションや家事などによる支援)が得られない未婚者は、総じて健康状態が悪く、心理的福利も低い状態にあると多くの研究が指摘する(Seccombe & Warner, 2003; Waite & Gallagher, 2000; Waite, 2000)。

ただし、そうした結論に一定の留保条件をあげる研究も多くあげられている。それらが指摘するのは、未婚者の心理的福利には、本人のジェンダー、社会経済的地位、自律能力が、未婚者の健康や心理的福利に交互作用をもたらしているということである(Forsyth & Johnson, 1995; Seccombe & Warner, 2004)。したがって、いちがいに未婚であることが、これらに負の影響をもたらすとは限らないという指摘がなされている。

これまでも NFRJ データを利用した論文だけに注目しても、個々の論文がさまざまな未婚者の特性について言及してきた。しかしそうした研究では未婚であるという状態を、分析モデルのなかの 1 変数として処理するにとどまっている。そうした研究からは、未婚者のライフコースやライフスタイルの全体像は、みえにくい。本論文ではあえて単純な記述を行うことにより、中高年未婚者たちのおかれたコンテキストを浮かび上がらせることを目指すことにしたい。

本論文のもうひとつの課題は、未婚者の福利を規定する要因を、未婚者特有の親族ネットワークとの関係みいだすことにある。ソーシャル・サポート研究では、ジェンダー、階層によるネットワークの異質性について指摘されている（大和,2000）。未婚者のおかれたコンテキストを記述するなかで浮きぼりになるのは、未婚者の親族サポート・ネットワークの特有な構造である。既婚者とは異なり、未婚者は親族関係のうち配偶者や子といったサポート資源をそもそも持ちえない。長期・短期的にさまざまなサポートが期待できる親族ネットワーク自体の乏しさは、中高年未婚者に特有のサポート期待のあり方をもたらしているはずである。そこで問われるべきは、サポート・ネットワーク資源への期待や利用可能性が、中高年者の福利そのものに、いかなる影響をもたらしているのかである。おそらく、配偶者・子以外の親族ネットワークとの援助関係や交際関係を綿密に保ち、なおかつサポートの資源として期待ができる場合には、福利は高い水準に保たれるはずであるという予想がなりたつ。この仮説を検証するために、本論では、福利の総合的な指標として、生活満足度を用いて、これを従属変数とし、サポート・ネットワークへの期待を説明変数とした重回帰分析を試みる。

## 2 . データの概要

この課題に取り組むために、以下では NFRJ03 データにおける 40 歳以上の未婚者、189 名を分析の対象とする。また、分析対象のうち男性は 108 名、女性は 81 名であった。年齢構成は 40-59 歳が 150 名、60 歳以上が 39 名である。

分析対象の総数は NFRJ03 データの当該年齢におけるサンプル数の 4 % であり、母集団における未婚率を大きく下回る。このことはたびたび過去に指摘されてきたように、NFRJ では都市部の単身者が調査対象から大きく抜け落ちていることに起因するものと考えられる。以下の分析では、このことに注意をする必要があるだろう。

全国調査のデータであるとはいえ、NFRJ データに占める未婚者の比率はごくわずかにすぎない。性別・年齢別のサンプル数としては、大きな誤差を認めざるをえないといえよう。また本来年齢別・男女別に行いたい集計も、サンプル数の少なさから全体での集計にせざるをえない部分も多々生じている。以下の記述については、この点についても注意をする必要がある。

## 3 . 中高年未婚者の生活像

### 3-1 居住形態と世帯

中高年未婚者の持ち家比率は分析対象の同年齢層に比べると、あきらかに低い。40 歳以上における持ち家保有率は、全体（未既婚を含む）で 85% に達するのに対して、40 歳以上の未婚者の男性では 63%、同年齢の女性が 73% の持ち家保有率である（以下、本文のデータに注目するとき「未婚者」「未婚」は 40 歳以上の中高年未婚者を指す）。

また世帯形態には単独世帯比率の高さが顕著に認められる。男性では41%、女性では47%が実に単独世帯である。世帯規模も小さい傾向にあり、男女ともに9割が、3名以下の世帯で生活をしている。同居者がいる場合には、その親族カテゴリーのほとんどが父・母・きょうだいに限られるのも、未婚者特有の傾向である。

親との同居率は、既婚者に比べると極めて高いという特徴も認められる。父もしくは母と同居をしている未婚者は実に男性で53%、女性で42%にのぼる。さらに両親のいずれかが生存している場合には、未婚男性の75%、未婚女性の70%に達している。つまり、単独世帯比率の高さと表裏して、むしろ未婚者の世帯形成は、親と同居することが標準的であり、親の死とともに単独世帯へと移行していく傾向にある。少なくとも「シングル」であること自体が、単独世帯の形成に結びつくわけではなさそうだ。

### 3-2 就業と所得

未婚者の多くは就業している。40歳以上の男性で75%、女性では63%が有業者である。40 - 59歳の年齢層に区切れれば、女性の78%が就業しており、同年齢における女性全体の就業率68%に比べて、顕著に高い傾向にある。しかも、この年齢層にある未婚就業者の実に88%が正規雇用の地位にある。

ただし所得水準は必ずしも高いものではなさそうである。年間の本人の収入からみれば、40歳以上の未婚者で、600万以上の収入を得ている者は1割程度にすぎず、300万以下の収入の者が56%を占めていた。

また、未婚者自身に暮らし向きの評価を訪ねたところ、「かなり苦しい」と評価する者の割合は既婚有配偶者を大きく上回っていた。とりわけ60歳台の高齢未婚者は、28%が「かなり苦しい」状況におかれていることは注目すべきであろう。

表1 中高年未婚者による暮らし向きの評価 ( % )

		n	かなり ゆとりがある	どちらかといえば ゆとりがある	どちらかといえば 苦しい	かなり苦しい
未婚者	(40-59歳)	148	1.4	35.1	45.3	18.2
	(60歳以上)	39	2.6	41.0	28.2	28.2
既婚有配偶	(40-59歳)	2350	2.2	38.5	47.2	12.2
	(60歳以上)	1640	3.0	49.9	39.1	8.0

## 4 . 未婚者の福利

つぎに未婚者の身体および心理における福利の水準を、有配偶者と比較することにしたい。有配偶との比較がここでの主眼であるが、参考までに、未婚と同様に無配偶である離死別者との対照も同時に行っている。

さて、以下では未婚者の福利を身体と心理の2面から総合的にとらえるために、NFRJ03データで測定された以下の項目に注目していく。(1)健康状態、(2)生活満足度、(3)ディストレス、(4)役割ストレインの各側面である。これらの変数について、先行研究で指摘されているような、未婚

者群の福利の低さが確認できるだろうか。

#### 4-1 健康状態

まず健康状態に注目することにしたい。NFRJ03 データでは健康状態を、「たいへん良い」、「やや良い」、「やや悪い」、「たいへん悪い」の4つの選択肢で測定している。ここではできるだけ単純な手法を用いて比較することとしたい。健康面ではこれらのうち「やや悪い」、「たいへん悪い」と回答した者の割合に着目し、配偶関係別の比較を試みた。図1に示されるように、あきらかに有配偶者の健康状態は比較的良好であり、健康状態が「悪い」と評価した者は、既婚無配偶者（未婚・離死別）に多い。図1では既婚無配偶者に比べて、未婚者の健康状態が悪いように見えるが、当該の年齢層にある未婚者数がわずかであるため、有意な差はみられない。

そこで40歳以上の未婚者全体（男女を含む）を併せて、配偶状態（有配偶・未婚の2群のみ）と健康状態（4カテゴリー）との独立性に関するカイ検定を行ったところ、5%水準で統計的に有意な差が認められた（ $\chi^2=12.56, df=3, p<0.05$ ）。

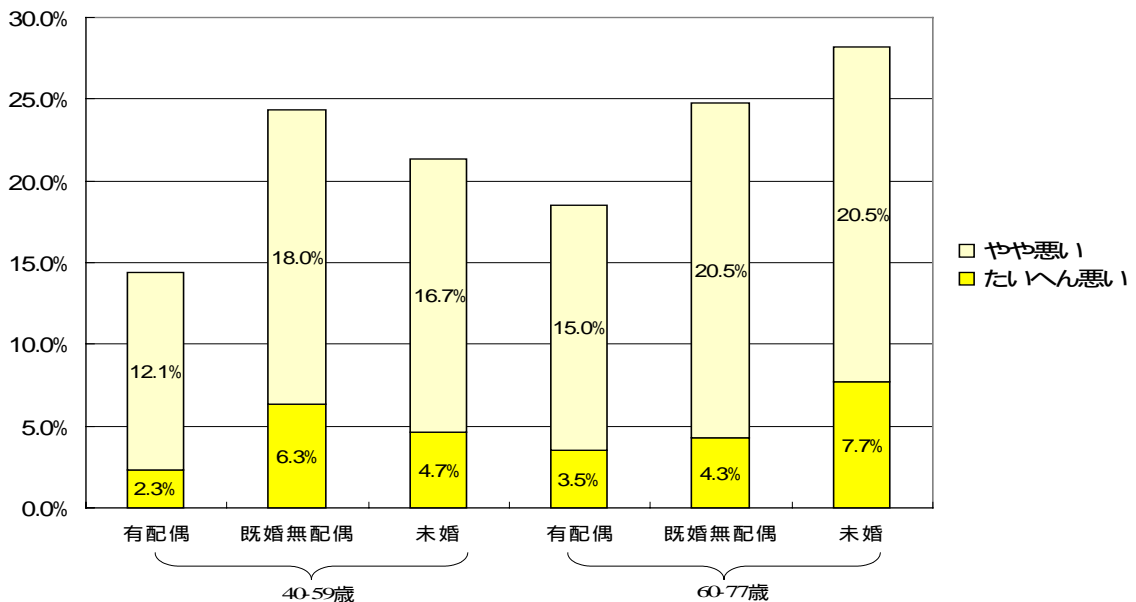


図1 配偶状態別に見た健康状態

ただし健康状態には、未婚者のなかでも性別による差が顕著に生じている。40歳から59歳のうち、男性における「悪い」と評価をした者の比率は24% (n=96)であるのに対して、女性は17% (n=54)にとどまっている。また60歳以上の高齢層では、男性が42% (n=12)に対して、女性は22% (n=39)にすぎない。もっとも性別による差については、有効なサンプル数が著しく少なくなるため、参考にとどめておきたい。

#### 4-2 生活満足度

つづいて同様の方法で、生活満足度の差異を配偶状態別に検討したい。生活満足度もまた4段階の選択肢からの評価にもとづいて測定されたものである。このうち「不満」に該当する者の割合を示したものが図2である。一見してあきらかに有配偶の不満群は少なく、既婚無配偶者の不満率はきわめて高い。上と同様の方法によって、40歳以上のサンプルを対象として、有配偶・未婚の配偶

状態別にみた生活満足度（4カテゴリー）のカイ2乗検定を行った。その結果、1%水準で有意な差が認められた（ $\chi^2=75.37, df=3, p<0.01$ ）

性別による差に着目すると、40-59歳の男性における不満群の比率は59%（n=95）に達しているのに対し、女性は33%（n=54）であった。また、60歳以上では83%（n=12）の男性が不満群であるのに対して、女性の不満群は54%（n=27）にとどまっている。サンプル数の少なさから、性別による差をここで強調することは避けたい。性別による効果については、最後の多変量解析において確認することとしたい。

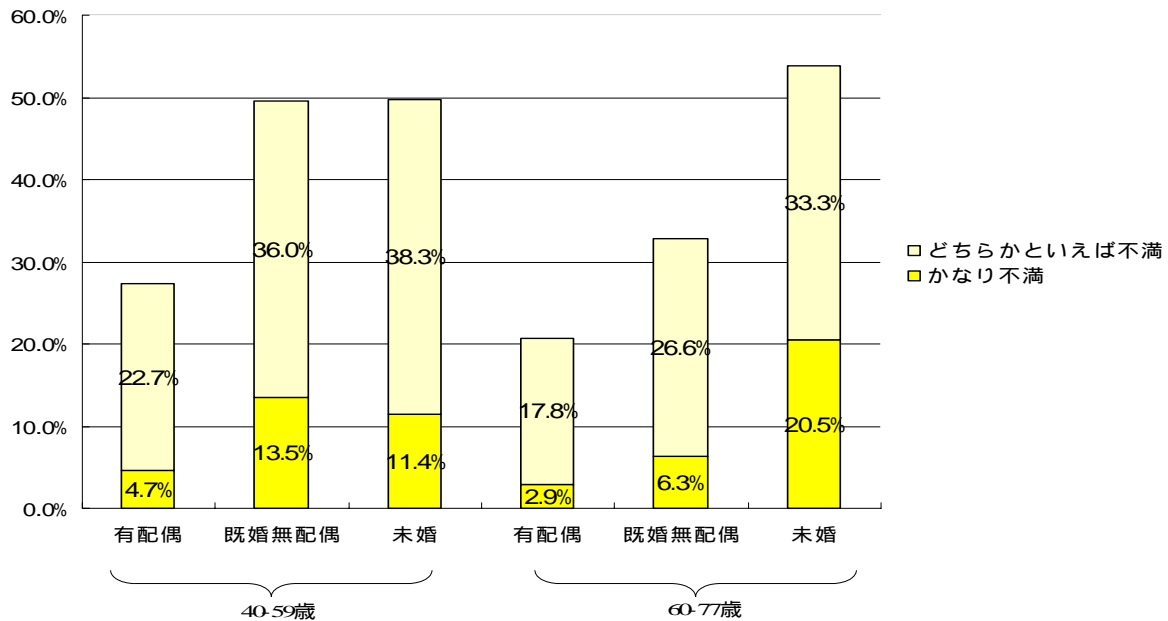


図2 配偶状態別にみた生活満足度

### 4-3 ディストレス

つぎに、配偶状態によるディストレスの差を検討する。心身のディストレスを示す、CESD 尺度を次の基準から得点化した。まず逆転項目の1項目を除いた、すべての項目をディストレスが高いほど高い得点があたえられるように、4点から1点の数値を割り当てた。これを加算し、配偶状態別の平均点を割り出したものをグラフ化したのが図3である。ここでも、有配偶者のディストレスが低く、無配偶者のディストレスが高い状態にあることが確認できる。若干ではあるが、未婚者よりも無配偶者のほうがディストレスは高い傾向にあるようだ。図3には年齢別の傾向も読み取れるが、高年齢層ではディストレスはやや低くなるものの、配偶状態による序列や格差にはほとんど変わらない。

ディストレスの差を検証するために、3つの配偶状態別に、ディストレスを従属変数とした一元配置分散分析を試みたところ、これも1%水準で有意な差が認められた（F 値=9.793, df=3985, p<0.01）。

性別による差に注目すると、40-59歳の男性では、平均得点は5.3（n=93）であるのに対して、女性は4.2（n=48）であり、女性のほうが著しく低い。また60歳以降の男性においては5.5（n=10）に対して女性は4.0（n=22）である。ここでも男女のあいだの大きな差が確認されたことになる。

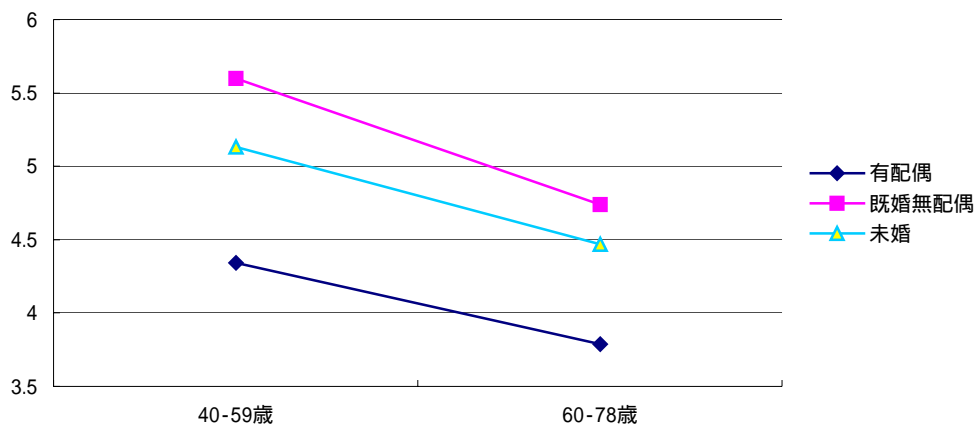


図3 配偶状態別に見たストレスの平均得点

#### 4-4 役割ストレイン

つぎに注目したいのは未婚者における役割ストレインである。未婚者は配偶者と子をもたないゆえに、家族と仕事とのあいだの役割葛藤にさいなまれることは少ないと予想される。しかし、親との同居から生じる介護や家計への不安は、むしろ有配偶者以上に強い可能性もある。

NFRJ03では役割ストレインを10項目から測定し、それぞれについて「まったくなかった」「ごくまれにあった」「ときどきあった」「何度もあった」の4段階で回答を求めている。集計に当たり、この4段階を「何度もあった」を3点とし、「まったくなかった」を0点となるようにリコードし、それぞれの項目の平均得点を求めた。

下の図4は、その平均得点の配偶状態別による分布を示したものである。なお、グラフには、未婚者が対象となる親族カテゴリーをもたない項目を除外している。

結果を要約すれば、40から59歳までの年齢層には、ほとんど有配偶者との差はみられないといってよい。未婚者よりも多くの項目で、有配偶者のほうが高いストレインを感じているようである。唯一の例外は、(ク)「職場や仕事上で『自分が理解されていない』と感じたこと」であった。60歳以上になると、突出して未婚者が高い得点を示す項目が現れている。これに該当するのは、(ウ)「親・義理の親のことで悩んだこと」であり、また就業者のみが該当する項目である((キ)「職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと」、(ク)「職場や仕事上で『自分が理解されていない』と感じたこと」、(ケ)「仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと」、(コ)「家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと」)。いうまでもなく、この年齢層で親を持つ者、仕事についている者は限定的である。したがって、突出したストレインの得点を示す項目の、有効な集計対象はわずかにすぎない。

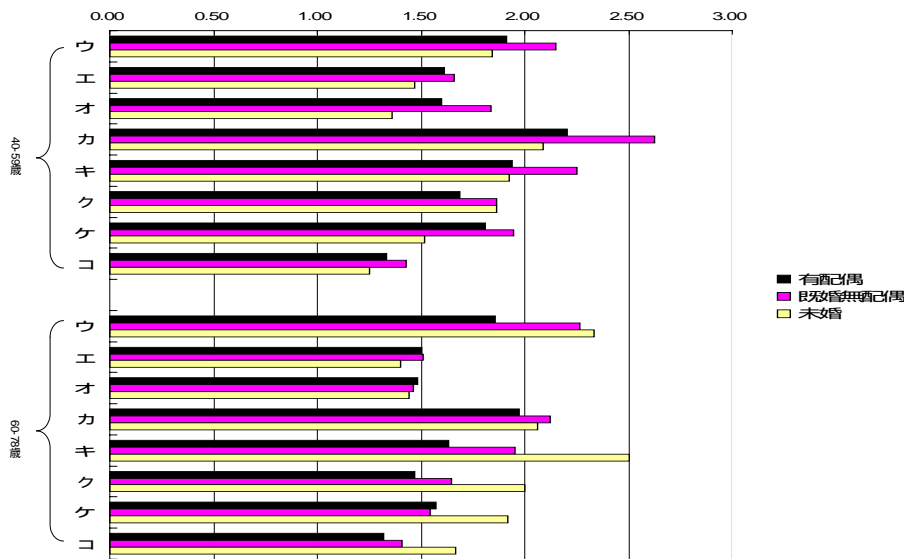


図4 配偶状態別に見た役割ストレインの平均得点

#### 4-5 未婚者の福利の総合的評価

すでにみたように、健康状態、生活満足度、ディストレスの面において、未婚者が有配偶者に比べて低い水準におかれていることが認められた。役割ストレインに関しては、むしろ有配偶者よりも低い傾向がややみられたが、本人も高齢で母親を介護している場合、就業している場合には、有配偶者よりも高い得点を示している。ここまでの知見を見るかぎりにおいて、未婚者の総合的な心理的・身体的福利が相対的に低いと結論づけてよい。ただし、性別による差が顕著であり、男性の福利が顕著に女性を下回っていることがこれまで確認できた事実である。

### 5. サポートの期待と援助行動

#### 5-1 親族サポート・ネットワーク

配偶者と子を持たない、未婚者には、サポート・ネットワークにも有配偶者にはない特徴がみられるはずである。以下では、未婚者が頼りうるサポート資源には、どのようなものがあり、どの程度の期待を抱いているのかを記述する。ここで使用する調査項目は、「問題で援助や相談相手がほしいとき、どのような人や機関を頼りにしますか」という問いである。具体的な状況として次の4つの場面が想定されている。(ア)「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」、(イ)「急いでお金(30万円程度)を借りなければならないとき」、(ウ)「あなたや家族の誰かが病気や事故で、どうしても人手が必要なとき」、(エ)「あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき」である。

この質問の回答は複数回答形式であり、選択しうるサポート・ネットワークの資源は、次の項目から選択することを求めている。その選択肢は、「配偶者」、「自分の親」、「配偶者の親」、「自分の兄弟姉妹」、「配偶者の兄弟姉妹」、「自分の子ども」、「子どもの配偶者」、「その他の親族」、「友人や職場の同僚」、「近所(地域)の人」、「専門家やサービス機関」であり、該当する資源をもたない場合には「誰もいない」を選択することとなっている。このうち、「その他の親族」までは、家族ないし親族として要約できよう。ここから、サポート資源は、(1) 家族・親族、(2) 近所・地域の人、(3) 友人・職場の同僚、(4) 専門・サービス機関の4種類に大別しうる。



未婚者の場合、このうち家族・親族に、頼りうる者がそもそも存在しない場合が多いことはいうまでもない。未婚者の場合、このうち論理的に存在しうるのは、自分の親と、自分の兄弟姉妹、その他の親族のみである。また、自分の親は中高年未婚者の年齢層では、すでに他界している場合も多いといえる。必然的に、未婚者たちが、有配偶者とはまったく異なるサポートへの期待を有していることは間違いない。

親族への期待に期待をする者は、有配偶者と比べて格段に低いことがわかる。「病気」の場合には、有配偶者と未婚者との差は少なく、比較的サポートを期待しうると考えられる。しかし介護においては、有配偶者に比べて未婚者では30ポイントほど期待できると考える者が少ない。

一方、「友人・職場」「近隣」「専門機関」に対しては、有配偶者よりもわずかに未婚者が高い期待を持っているようである。おそらく、「友人・職場」への期待の高さは、未婚者における就業率の高さを反映していると考えられる。だが、いずれのカテゴリーへの期待も、未婚者が有配偶者を大きく上回っているとはいえない。結果として、頼りうる者（専門機関を含む）が「誰もいない」という者が、中高年未婚者の全体からみればわずかであるが、有配偶者に比べて顕著に高くなる。とりわけ長期的なサポートを期待せざるをえない「介護」については、高齢の親には期待しがたいものである。「介護」を期待できる者はいないと回答する未婚者は15%程度に上っている。

もっとも興味深い傾向は、「専門・サービス機関」への期待が、有配偶者に比べて、未婚者においてとりたてて高い傾向は、まったくといって見られないことである。唯一「介護」は有配偶者に比べて未婚者をあきらかに上回っているが、1割ほどの差はむしろわずかであるとさえいえる。

では、未婚者にとって、サポートを期待しうる親族カテゴリーは何なのだろうか。40-59歳と、60歳以降の年齢層に分けて、集計を行ったものが図6である。図6では未婚者に論理的に存在しうる親族カテゴリーのみをあげており、また親が高齢になっている60歳以上の年齢層では、親を除外した結果を示している。一見してわかるのは、有配偶者に比べて、「きょうだい」に期待が集中する傾向にあるということである。とりわけ、親のサポートが期待しえない、高齢層で、「きょうだい」への期待が突出して高くなっている。

また、「その他の親族」への期待も、全体に占める比率はわずかであるが、有配偶者と比べて顕著に高い結果となった。40-59歳の年齢層では、「病気」のさいに対する期待が2割近くにも達しており、60歳以上の高齢層では、「介護」以外のサポートに1割以上の者が「その他の親族」に期待しているのである。

未婚者にとってサポートを期待できる親族とは、具体的には何なのだろうか。論理的には、おじや叔母、あるいは甥や姪、いとこなどの可能性が考えられるが、実際のところはNFRJの調査項目から知ることはできない。しかし、彼らが頼りにしうるだけの、経済力と親密性の高さから推し量れば、甥・姪がもっとも期待しうるサポート源であろうといえる。甥・姪も、きょうだいを通じたサポート・ネットワークの資源であり、未婚者におけるきょうだいの存在は、彼らの福利に、きわめて重要な影響をあたえらるうと考えられる。



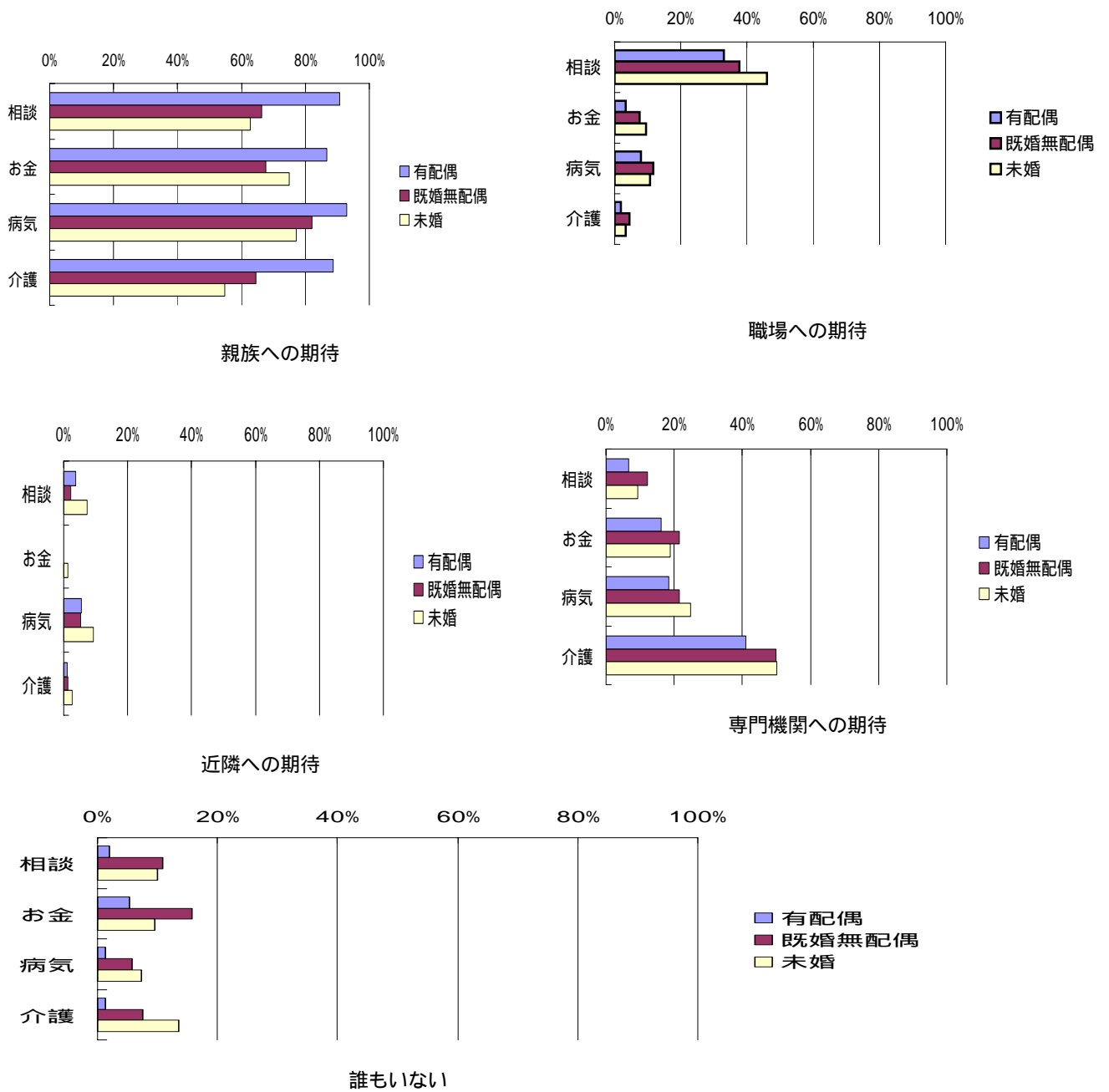


図5 配偶状態別に見たサポート依存期待率

さて、ここまでの記述から、未婚者におけるサポート期待の特徴は、次のように要約することができる。まず、(1)サポートへの親族への期待は、有配偶者よりも弱い。しかし同時に、(2)きょうだいに関するサポートへの期待は、有配偶者に比べて突出して高い。(3)「その他の親族」に対する期待は、有配偶者に比べて相対的に高い。

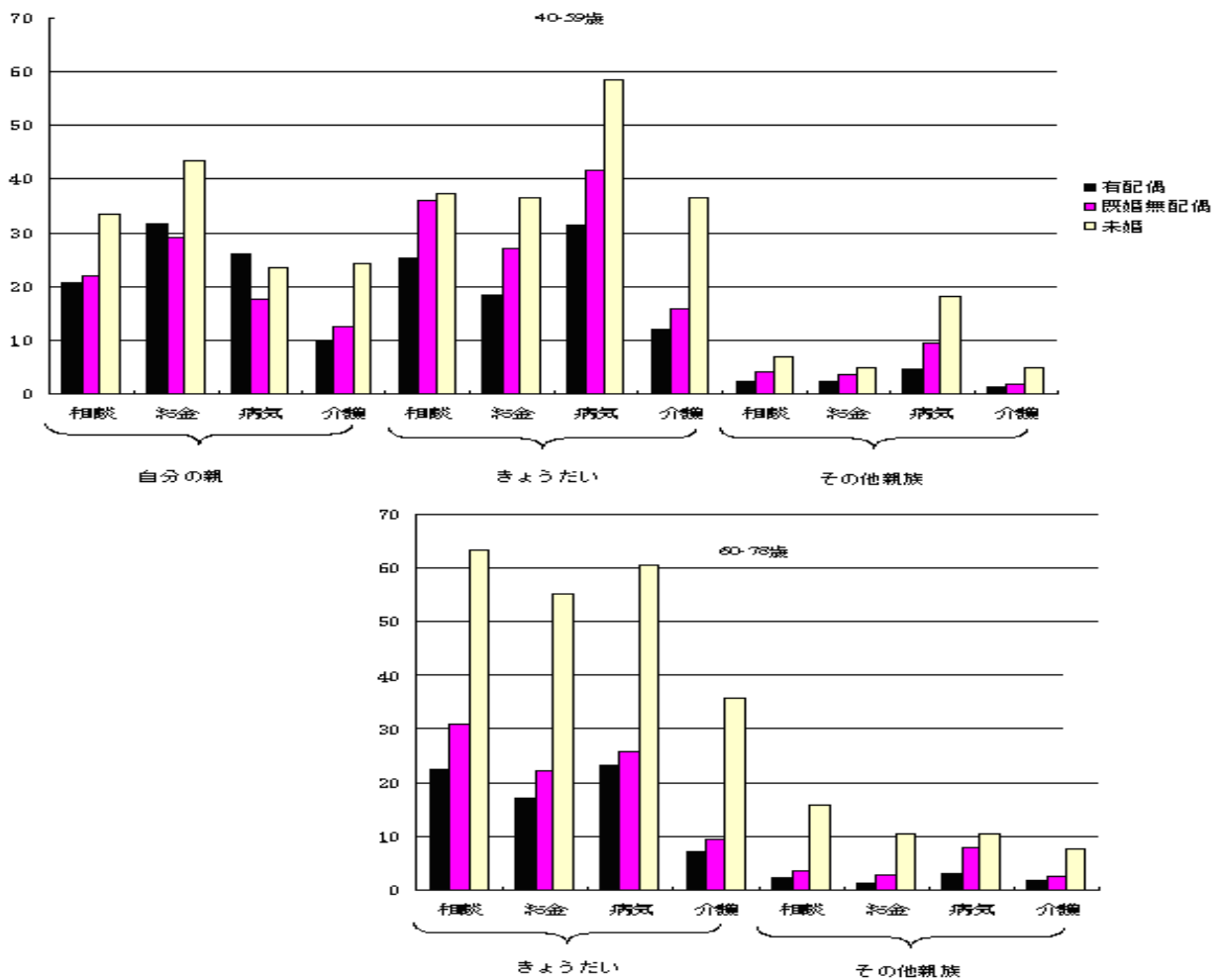


図6 未婚者における親族カテゴリー別のサポート依存期待率

### 5-2 親・きょうだいとの援助関係

では、実際の援助行動は、サポートとして期待できる、親や、きょうだいのダイアド間でどの程度交わされているのだろうか。表2は、調査対象者本人と、父母ときょうだいとのあいだの、援助行動の有無を、有配偶者と未婚者で比較したものである。具体的な調査項目としては、非経済的な援助行動の授受を用いた（「この1年間に、この方から金銭以外の援助（相談にのってもらったり、看病や手伝いをしてもらうなど）を受けましたか」、「この1年間に、この方に金銭以外の援助（相談相手になったり、看病や手伝いをするなど）をしましたか」）。経済的な援助の授受についてもNFRJ03で尋ねているが、ここでは使用しないこととする。1年のあいだに実際にこれを行っている者の割合はきわめて低いからである。また、きょうだい間の援助の授受は、有効サンプル数を比較的多く確保できる、本人を除いて上から2番目までのきょうだいのみを集計の対象とした。

さて、父母・きょうだいとの援助の授受には、有配偶者と未婚者で、どのような差異がみられるだろうか。サンプル規模から統計的有意な差のみに注目すべきであろう。統計的に有意な差を示しているのは、きょうだいから本人への援助のみであり、きわめて大きい差が生じている。また、本人からきょうだいへの援助も有意ではないが、やや有配偶者に比べて高い。

さて、ここでも性別による違いについて触れておく必要があるだろう。「きょうだい 本人」という方向の非金銭的援助は、男女ともに有意に未婚者において高かった（集計表および検定結果は省

略する。きょうだい1の分析において有意水準1%で男女共に有意)。一方で、「本人 きょうだい」という方向の非金銭的援助は、未婚者が男性である場合には、有意な差がみられず、本人が女性である場合に限って、未婚者に経験率が高い傾向が統計的に有意に認められた(きょうだい1の分析において、女性のみ有意水準1%で有意)。高齢者における、きょうだい間の交流頻度の高さやサポートの重要性がわが国で注目されており、交流頻度と配偶状態の関連も有意であることが指摘されている(安達,1999)。NFRJ03データの未婚者においても、有配偶者よりも、きょうだいとの援助関係が密であることが確認できた。

未婚者ときょうだい間における相互的な援助関係は、援助の方向性を問わなければ、未婚者において頻繁に行われている傾向がみとめられるといえよう。ただし、本人からの援助に関しては性別による交互作用が生じているようである。

表2 中高年者(40歳以上)における非金銭的援助行動経験率

	有配偶		未婚		
	n	%	n	%	
父親 本人	1016	16.8	59	20.3	
本人 父親	1014	41.1	59	35.6	
母親 本人	1894	19.7	119	26.1	
本人 母親	1890	50.5	119	52.9	
きょうだい1 本人	3642	10.6	163	23.9	**
本人 きょうだい1	3656	11.4	163	15.3	
きょうだい2 本人	2707	8.2	95	20.0	**
本人 きょうだい2	2701	8.6	95	14.7	*

注：検定はカイ2乗検定による。

p<.05 \*

p<.01 \*\*

## 6. 親族間の援助行動とサポート期待の効果

これまでにみたように、健康面・心理面において中高年未婚者の福利は、有配偶者に比べて、低い水準にあるといえる。つぎに、どのような要因が福利を低下させるのかをあきらかにしたい。福利の総合的指標として、従属変数に生活満足度を用いることとする。

説明変数として採用する変数は大きく分けて3つのタイプに分別できる。まず第1に、性別、年齢、学歴、世帯収入、健康状態といった基本属性である。

第2の説明変数のタイプは、親族ネットワークの有無に関するものである。個人の保有する親族ネットワークの効果を知るために、きょうだいの有無と、母親が健在であることを示すダミー変数を作成し分析に組み込むこととした。父親の生存に関しては、母親が健在であるかどうかと強く関連しているため、分析からは除外した。また母親の健在を示すダミー変数は、年齢との相関関係が強く生じている。さいわい年齢はモデル1で有意な効果がみられなかったため、モデル1を除いては、年齢を説明変数から除外したモデルを作成した。

第3の説明変数として分析に組み込まれるのは、親族ネットワークの利用可能性に関する、未婚者自身の行動および期待である。具体的に使用する項目は、次の2つに分類される。

サポートの行動を示す変数は、すでに記述した、きょうだい間での非金銭的な援助の提供と受領に関する質問から作成したものである。ここでは、1人目のきょうだいのみに注目し、このきょうだいに対する援助の提供があったことを示すダミー変数を作成した。また、援助の受容があったことを示すダミー変数も同様に作成した。

サポートに関わる期待を示す変数は、援助を必要とするさいの、親族サポート・ネットワークへの期待の有無から作成することとした。具体的にはすでにみたように、介護、病気、金銭、および相談ごとにおいて利用しうるサポート資源を尋ねた項目をもとに、これらの事態に対して、親族のサポートを期待している場合には1を、親族への期待がない場合には0とコーディングした。

さて、分析結果の一覧表が表3である。まず基本属性から注目すると、男性であることと、世帯年収の低さ、加えて健康状態の悪さが生活満足度を大きく押し下げていることがわかる（いずれも1%水準で有意）。一方で、年齢と学歴の効果はほとんどみられなかった。

次いで、第2の説明変数群の効果を見たモデル2に着目すると、きょうだいの有無も、母親の生存もまったくといっていいほど生活満足度には影響がないことがわかる。

表3 生活満足度の規定要因についての重回帰分析

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
性別：男性ダミー	-.275 **	-.261 **	-.275 **	-.275 **
年齢	-.032			
学歴：高学歴（短大以上）ダミー	.072	.073	.068	.063
世帯収入：300万以下ダミー	-.299 **	-.302 **	-.293 **	-.297 **
健康不良ダミー	-.300 **	-.301 **	-.310 **	-.316 **
きょうだいありダミー		-.053		
母親生存ダミー		.041		
きょうだい援助：提供ダミー				-.056
きょうだい援助：受領ダミー			-.058	
定数	3.045	2.978	2.933	2.936
調整済み決定係数	.305	.290	.305	.305
N	168	164	166	166

(表3つづき)

	モデル5	モデル6	モデル7	モデル8
性別：男性ダミー	-.285 **	-.262 **	-.286 **	-.286 **
年齢				
学歴：高学歴（短大以上）ダミー	.047	.085	.075	.068
世帯収入：300万以下ダミー	-.303 **	-.288 **	-.324 **	-.318 **
健康不良ダミー	-.302 **	-.299 **	-.295 **	-.301 **
親族期待（介護）ダミー	-.079			
親族期待（病気）ダミー		.055		
親族期待（お金）ダミー			-.104	
親族期待（相談）ダミー				-.134
定数	2.972	2.802	3.056	3.068
調整済み決定係数	.312	.310	.314	.322
N	166	166	166	167

p<.05 \* p<.01 \*\*

親族ネットワークへの期待と援助行動については、援助ができる親族カテゴリーの存在自体との相関が強いため、母親の生存、きょうだいの有無の変数をモデルから除外することにした。また、援助行動の2変数、援助の期待を4つの状況別に尋ねた4変数も、相関が高いことが確認されたため、ひとつひとつモデルに変数を組み込むこととした。モデル3, 4は援助行動の有無を組み込んだモデルであり、モデル5から8は援助期待の4変数を検討したモデルである。

結果の示すところは明確であり、援助行動、援助期待のいずれも、生活満足度を押し上げる効果を確認することはできない。サンプル規模が小さいため、もともと有意な効果は得にくい状況にあるが、標準化係数もまたほぼ無効果であることを示している。

## 7. 考察

以上の記述と分析により、中高年未婚者の福利とその規定要因の一端があきらかになった。まず本論文では、未婚者、とりわけ男性の未婚者において、健康状態、生活満足度、ディストレスの面から、未婚者の福利が総合的に低い水準にあることを指摘した。

本稿では、さらに未婚者のサポート・ネットワークの構造と期待が有配偶者と大きく異なることを確認した。未婚者には、そもそも資源として利用可能な親族の対象が限定されており、必然的に利用可能性が低くなることはいうまでもない。その結果として、問題が生じたときのサポートとして親族を期待しうる者は、有配偶者に比べて格段に少なく、利用しうる親・きょうだいに期待が集中する傾向が確認できた。とりわけ、きょうだいへの期待が強いことが未婚者の特徴であり、その背景として、実質的な援助も、未婚者において有配偶者よりも活発に行われていた。

しかし、ここでは、未婚者の生活満足度と親族サポート・ネットワークとの関連を見いだすことはできなかった。依存度が高いはずの親族のサポートが利用できない場合にも（親・きょうだいが存在しない場合）あるいは、実際のサポート関係がない場合にも、生活満足度に影響はみられなかったのである。

これは矛盾した結果のようにみえる。今回の分析をもって、親族によるサポートの利用可能性と生活満足度との関連がないものと結論づけることは早計であろう。この結論を出すためには、測定や分析の双方に立ち返り再検討をする必要がある。たとえば、サポート・ネットワークへの依存に関する期待は、現在そうした必要に直面しているか否かで、回答の前提も大きく異なるはずである。

たとえば、現状の生活に問題が生じていない者は、満足も高く、サポート・ネットワークの必要性を感じていない場合が考えられるだろう。つまり、説明変数に採用した回答そのものが、生活満足度を間接的に反映したものなのかもしれない。あるいは逆に、そうした支援を望むか望まないかに関する、本人のパーソナリティの効果が生じているのかもしれない。事実、高齢の未婚者のパーソナリティ特性に注目した研究には、未婚者は独立心が強く感情的な孤立を志向する傾向があることを指摘しているものもある（Chudacoff, 1999; Waehler, 1996）。

また、きょうだい間の援助の有無もまた同様の問題をはらんでいる。つまり援助の必要性が高いために、きょうだいからの援助がなされている可能性が考えられる。そうした場合、親族からの援助があり、サポートの期待がなされていようと、本人の生活満足度が低いままにとどまるであろう。

こうした問題を回避しつつ、未婚者の福利におけるサポート・ネットワークの効果をさぐる方法については今後の検討課題となる。

## 参考文献

安達正嗣, 1999, 『高齢期家族の社会学』, 世界思想社.

Chudacoff, H.P., 1999, *The age of the bachelor: Creating an American subculture*, Princeton

University Press.

Secombe, K., & Warner, R. L., 2003, *Marriage and Families With Infotrac: Relationships in Social Context*, Wadsworth Pub Co

大和礼子, 2000, 「 ” 社会階層と社会的ネットワーク ” 再考 <交際のネットワーク> と <ケアのネットワーク> の比較から 」 『社会学評論』 51(2), 235-250.

Waehler, C.A., 1996, *Bachelors: the Psychology of Men Who Haven ' t Married*. Westport, CT: Praeger.

Waite, L.J., & Gallagher, M., 2000, *The case for marriage* , New York: Doubleday.

Waite, L.J., 2000, “ Trends in men ' s and women ' s well-being in marriage ” , In L.J. Waite, C. Bachrach, M. Hindin, E. Thomson, & A. Thornton (eds.), *The Ties that Bind: Perspectives on Marriage and Cohabitation* (pp.368-392). NEW YORK: Aldine de Gruyter.